

月例経済報告

昭和58年9月16日 経済企画庁

目次

概観

- 1 海外経済:アメリカ経済の回復続く
- 2 国際収支:円相場は弱含みで推移
- 3 国内需給:生産は増加傾向
- 4 物価:物価の安定基調続く
- 5 財政金融:貸出金利は引続き低下

概観

海外経済:アメリカでは個人消費や住宅投資などが増加したことから、4~6月期の実質GNPが大幅に増加し、鉱工業生産も引続き増勢を示すなど、景気は回復を続けている。西欧経済をみると、フランス、イタリアではなお景気が停滞しているものの、イギリス、西ドイツでは、緩やかな景気回復が続いている。欧米諸国の雇用情勢は依然厳しい状況にあるものの、アメリカでは、失業率はこのところ低下傾向にある。物価はアメリカでは鎮静化が続いており、西ドイツ、イギリスでも落ち着いている。一方、アメリカの金利は引続き高水準で推移している。国際通貨市場をみると、7月末から8月初旬にかけて急騰したドルは、8月中旬に反落したものの、月末にかけては強含みで推移した。国際商品市況は7月下旬以降上昇したが、8月に入ってほぼ横ばいで推移している。

我が国経済:個人消費の伸びは弱い動きを示していたが、このところやや持直しの気配もみられる。設備投資は、大企業では一部に増額修正の動きはあるものの、なお弱含みとなっており、中小企業では停滞が続いている。住宅建設は前年水準を下回って推移している。一方、輸出は増加傾向が続いており、鉱工業生産も緩やかながら増加傾向にある。労働力需給はなお悪化した状態にある。また、物価面では卸売物価は引続き安定した動きを示し、消費者物価も落ち着いた動きとなっている。7月の国際収支をみると、貿易外収支等の赤字幅は拡大したものの貿易収支(季節調整値)の黒字幅が拡大したため、経常収支(季節調整値)の黒字幅は拡大した。一方、長期資本収支は、本邦資本の流出幅は縮小したが、外国資本の流入幅が大幅に縮小し、流出超過幅が拡大した。

また、円相場は、8月は月初から弱含みで推移し、中旬には246.75円と本年最安値となったあと、下旬にかけてやや反発したが月末には再び軟化し、246.60円で越月した。

以上、我が国経済では、輸出や生産が増加傾向にあり、物価も安定している。しかし、国内需要の回復力はなお盛り上がりを欠くものとなっている。

このような経済情勢にかんがみ、政府は先に決定した今後の経済対策を着実に推進していくこととする。

1 海外経済:アメリカ経済の回復続く

アメリカの経済をみると、個人消費や住宅投資などが増加したことから、4~6月期の実質GNP(第1次改訂値)は前期比年率9.2%の大幅増となり、鉱工業生産も8か月連続増加するなど、景気

は回復を続けている。雇用情勢は依然厳しい状況にあるものの失業率はこのところ低下傾向にあり、物価も鎮静化が続いている。金利は引続き高水準で推移している。

民間住宅着工件数は、6月前月比3.0%減のあと、7月も同0.6%減となったが年率174万戸と依然高水準にある。名目個人消費は6月前月比0.5%増(実質は0.3%増)のあと7月は同0.4%増となった。製造業在庫率は、6月1.48か月から、7月は1.49か月とわずかながら上昇した。こうした中で鉱工業生産は8か月連続して増加し、7月は前月比1.8%増となった。また、景気先行指標は11か月連続して上昇し、7月は前月比0.3%の上昇となった。失業率は7月9.3%のあと8月9.4%となお高い水準にあるが、このところ低下傾向にある。

物価は鎮静化が続いている。完成財卸売物価は前月比で7月0.1%の上昇のあと、8月は0.4%の上昇(前年同月比は1.4%の上昇)となった。消費者物価は前月比で6月0.2%の上昇のあと、7月は0.4%の上昇(同2.4%の上昇)となった。貿易収支(季節調整値)の赤字幅は4~6月期164.6億ドルのあと、7月は63.6億ドルへと拡大した。金融面をみると、マネーサプライM₁は7月前月比年率8.7%増のあと8月も同2.6%増と鈍化し、7月に発表された増加率目標圏内(83年4~6月期比年率5~9%)に収まった。しかし、金利は当局の引締め気味の政策運営のもとで8月初めにさらに上昇したのち、高水準で推移している。

西欧経済をみると、フランス、イタリアはなお景気が停滞しているものの、イギリス、西ドイツでは緩やかな景気回復が続いている。雇用情勢は依然厳しい状況にある。西ドイツでは内需の回復から4~6月期の実質GNPが前期に続いて増加し、鉱工業生産も増加傾向にあるなど、緩やかな景気回復が続いている。フランスでは純輸出の改善がみられるものの個人消費、設備投資が引続き不振であり景気は依然停滞している。イギリスでは個人消費の増加などから実質GDPは小幅ながら5期連続の増加となっており、景気は引続き緩やかに回復している。イタリアでは鉱工業生産の減少傾向が続くなど景気は引続き停滞している。なお、物価はフランス、イタリアでは依然高水準であるが、西ドイツ、イギリスでは落ち着いた動きとなっている。

国際通貨市場をみると、7月末から8月初旬にかけて急騰したドルは、8月中旬に反落したものの、月末にかけては強含みに推移した。

国際商品市況をみると、SDR換算ロイター指数は7月下旬以降アメリカ等での異常気象による農産物等の値上がりを中心に上昇したが、8月に入ってほぼ横ばいに推移している。

石油情勢をみると、増加を続けていたOPEC諸国の原油生産は6月にはほぼOPEC総会で決定された生産上限に達した。一方、8月中もスポット価格は公式販売価格付近で安定的に推移している。

2 国際収支:円相場は弱含みで推移

輸出は通関輸出(数量ベース)でみると、前月比で6月3.7%増のあと、7月は0.3%減(前年同月比8.1%増)となったが、増加傾向が続いている。最近数か月の動きを品目別にみると、電気機器、テープレコーダー、化学製品などが増加している。また、地域別輸出通関額(ドルベース)の動きをみると、このところアメリカ、東南アジア向けなどが増加している。

8月の通関輸出(速報、数量ベース)は前月比5.2%増(前年同月比16.4%増)となっている。輸出の先行きを示す輸出信用状接受高(ドルベース)は、前月比で7月3.3%増のあと、8月も2.9%増(前年同月比11.2%増)となった。

輸入は一進一退で推移している。通関輸入(数量ベース)は前月比で6月に原粗油の反動増、大型航空機の購入などから、14.4%増となったあと、7月は12.8%減(前年同月比3.2%減)となった。最近数か月の動きを品目別にみると、製品類は機械機器などにより増加したものの、原料品は木材、金属原料などにより減少し、鉱物性燃料も原粗油により低水準で推移している。また、製品輸

入比率(ドルベース)は7月29.3%となった。8月の通関輸入(速報、数量ベース)は前月比9.4%増(前年同月比1.6%増)となっている。

輸出入の動きを円ベースで見ると、輸出は前月比で7月1.0%減、8月(速報)3.5%増(前年同月比5.1%増)となっており、輸入は7月10.1%減、8月(同)7.0%増(同10.1%減)となった。また、ドルベースで見ると、輸出は7月0.9%減、8月(同)4.1%増(同11.5%増)、輸入は7月12.1%減、8月(同)4.4%増(同4.8%減)となっている。

7月の国際収支をみると、貿易外収支等の赤字幅が拡大したものの、貿易収支(季節調整値)の黒字幅が輸入の減少から拡大したため、経常収支(季節調整値)の黒字幅は5,102億円(2,122百万ドル)と前月に比べ拡大した。また、長期資本収支も本邦資本の流出幅は縮小したものの、外国資本の流入幅が証券投資、外債を中心に大幅に縮小したため、流出超過幅は4,325億円(1,799百万ドル)と前月に比べ拡大した。以上により、基礎的収支(季節調整値)は777億円(323百万ドル)の黒字となった。一方、短期資本収支等は438億円(182百万ドル)の流出超過となった。以上の結果、総合収支(季節調整値)は339億円(141百万ドル)の黒字となった。

外国為替市場における8月の円相場(対米ドル、インターバンク翌日渡し中心相場)は、月初243.10円から弱含みで推移し、中旬には246.75円と本年最安値とならたあと、下旬にかけてやや反発したが月末には再び軟化し、246.60円で越月した。

8月の外貨準備高は月中541百万ドル減少し、月末には24,398百万ドルとなった。

3 国内需給:生産は増加傾向

個人消費の伸びは、弱い動きを示していたが、このところやや持直しの気配もみられる。個人消費の動きを家計調査で見ると、実質消費支出(全世帯)は前年同月比で5月0.9%減のあと、6月は1.6%減となった。6月の動きを世帯別にみると、勤労者世帯では0.5%減、一般世帯では4.6%減となっている。また、農家世帯(農家経済調査)の実質現金消費支出は、前年同月比で5月5.5%増のあと、6月は5.0%増となっている。

その後の消費動向を小売売上げ面から見ると、全国百貨店販売額は前年同月比で6月0.5%減のあと、7月は3.7%増となったが、こうした動きには天候要因も影響している。また、チェーンストア売上高(店舗調整後)は、前年同月比で6月0.9%増のあと、7月は3.3%増となった。乗用車(軽を含む)の新車新規登録・届出台数は、7月は車検制度変更に伴い前年同月比17.6%増となったあと、8月も12.3%増となった。

賃金の動向を毎月勤労統計で見ると、現金給与総額は前年同月比で6月4.2%増のあと、7月は3.8%増となった。給与の内訳をみると、定期給与が3.3%増(うち所定内給与3.2%増)、特別給与が4.6%増となっている。実質賃金は前年同月比で6月2.2%増のあと、7月は1.6%増となった。

住宅建設は、前年水準を下回って推移している。新設住宅着工戸数(季節調整値)をみると、総戸数は前月比で6月12.8%増のあと、7月(速報)は6.1%減(前年同月比3.4%減)の8万9千戸(年率106万5千戸)となった。7月の動きを資金別にみると、前月比で民間資金住宅が0.2%減(前年同月比12.7%増)、公的資金住宅が9.9%減(同17.6%減)となった。

設備投資は、大企業では一部に増額修正の動きはあるものの、なお弱含みとなっている。また、中小企業では停滞が続いている。

大蔵省「法人企業統計季報」(全産業、58年4~6月期)によると、設備投資実績は前年同期比で0.6%増となった。これを規模別にみると、資本金10億円以上は前年同期比で0.7%減、資本金1億円以上10億円未満は11.9%増となっている。資本金1千万円以上1億円未満は4.5%減となっている。また、業種別にみると、製造業で6.6%減、非製造業で6.1%増となっている。同じく、日本銀行

により前月比0.5%の下落(前年同月比1.3%の下落)となった。また、輸出物価は為替円安により上昇となり、輸入物価は為替円安に加え海外高による食料品、飼料の値上がりもあって上昇した。この結果、総合卸売物価は前月比で7月0.2%上昇のあと、8月は0.2%の下落(前年同月比2.9%)の下落となった。

8月の商品市況(月末対比)は、海外相場高、需給改善などから上昇した。品目別にみると、銅が海外相場安から、ひのき正角が需要不振から下落したが、大豆、アルミ地金等が海外相場高から、棒鋼、合板、綿糸等が需給改善からそれぞれ上昇した。

消費者物価は落ち着いた動きを示している。7月の全国指数は食パン、切り花が値上がりしたものの、生鮮果物や夏物衣料などの値下がりなどにより、前月比0.5%の下落(前年同月比2.2%の上昇)となった。なお生鮮食品を除く総合(季節調整値)は前月比0.3%の上昇(前年同月比1.7%の上昇)となっている。

8月の動きを東京都区部速報でみると、前月比は0.4%の下落、前年同月比も1.3%の上昇と落ち着いた動きとなった。費目別にみると前月に比べ天候不順により生鮮野菜が値上がりしたものの、夏物の衣料、シャツ・下着、通話料、ガソリンは値下がりした。

なお、生鮮食品を除く総合(季節調整値)は前月比0.2%の上昇(前年同月比1.6%の上昇)となっている。

5 財政金融:貸出金利は引続き低下

日銀券の月中平均発行残高は、前年同月比で7月5.0%増のあと、8月は4.8%増となった。

8月の財政資金対民間収支は、2,924億円の散超(前年同月は5,955億円の揚超)となった。散超となったのは今年の前年と比べ国債発行額が減少したことや、外為会計の揚超幅が縮小したこと等による。

8月の短期金融市場をみると、コール・レート(無条件物)は、前月末の6.5625%から、月前半にやや高目に推移したあと、月後半は落ち着いた動きを示した。手形レート(2か月物)は、インターバンク市場の先行きの資金不足見込みを反映して月央に上昇した。現先市場をみると、手形レート、CDレートに鞅寄せする形でレートは月初上昇したが、その後は証券会社の手持在庫水準が低く、売りが少ないことから横ばいに推移した。

企業金融の動向をみると、目立った資金需要の動きはなく、全体として落ち着いた動きを続けている。

マネーサプライ($M_2 + CD$)の月中平均残高を前年同月比でみると、6月7.7%増のあと7月は7.1%増となった。

全国銀行の貸出約定平均金利は、総合では7月中0.014%低下し、月末には7.064%となった。また、長期では月中0.008%低下し、月末には7.986%、短期では月中0.005%低下し、月末には6.344%となった。

8月の公社債市場をみると、月央までは米国金利、円相場等、外部環境の不透明感から相場はやや弱含みで推移したが、月央以降、都地銀の債券売却圧力の低下等を反映し、相場は強含んだ。

8月の株式市場の動向をみると、上旬は米国金利の上昇、円相場の軟化等から相場はやや下落したが、中旬以降は企業業績回復期待に加え、米国金利上昇懸念の弱まりもあり、大型株を中心に相場は上昇した。

以上の結果、月末の東証株価指数(43年1月4日=100)は678.53と前月末(665.54)を上回った。

[発行年リストへ](#) [発行年月日リストへ](#)

民間住宅着工件数は7月2.8%増のあと、8月も8.4%増となり、年率194万戸と78年12月以来の高水準となった。名目個人消費は7月前月比0.4%増のあと、8月は耐久財購入の減少等から同0.3%減とわずかながら減少した。こうした中で鉱工業生産は9か月連続して増加し、8月は前月比0.9%増となった。なお、景気先行指標は82年8月以来1年ぶりにわずかながらマイナスとなり、8月は前月比で0.1%低下した。失業率は8月9.4%のあと9月9.1%と高い水準にあるが、このところ低下傾向にある。

物価は鎮静している。完成財卸売物価は前月比で7月0.1%上昇のあと、8月は0.4%(前年同月比1.4%)の上昇となった。

消費者物価は前月比で7月0.4%上昇のあと、8月も0.4%(同2.6%)の上昇となった。貿易収支(季節調整値)の赤字幅は7月63.6億ドルのあと、8月は71.9億ドルへとさらに拡大した。

金融面をみるとマネーサプライ M_1 は、3か月前比年率で8月5%増のあと、9月中も増加率目標圏内(83年4~6月期比年率5~9%)で収まった。金利は依然高水準ながら9月末にかけて若干低下した。

カナダでは、個人消費、住宅投資の増加等から、4~6月期の実質GNPが2期連続の増加となり、鉱工業生産も増加するなど、着実な景気回復が続いている。

西欧経済をみると、フランス、イタリアはなお景気が停滞しているものの、イギリス、西ドイツでは緩やかな景気回復が続いている。雇用情勢は依然厳しい状況にある。西ドイツでは内需の回復から鉱工業生産が増加傾向に整るなど、景気の回復が続いている。フランスでは純輸出の改善がみられるものの、個人消費、設備投資が引続き不振であり、景気は依然停滞している。イギリスでは住宅投資の回復や設備投資の底入れがみられ、景気は引続き緩やかに回復している。イタリアでは実質GDPや鉱工業生産の減少傾向が続くなど、景気は引続き停滞している。なお、物価はフランス、イタリアでは依然高水準であるが、西ドイツ、イギリスでは引続き落ち着いた動きを示している。

その他の地域の経済をみると、オーストラリアでは設備投資の不振などから景気後退が続いているが住宅投資の回復など一部に明るい兆しもみられる。しかし、失業率、物価とも依然高水準にある。中南米では、メキシコは景気停滞が続いているが貿易収支の黒字幅が拡大し、物価上昇率も鈍化傾向にある。ブラジルでは貿易収支の改善がみられるものの物価は騰勢を強めてわり、なわ経済情勢は厳しい。北東アジアでは、韓国は建設投資、個人消費が堅調で鉱工業生産も増加するなど景気回復が進んでいる。台湾地域では輸出が増加に転じ、鉱工業生産も増勢を強めるなど、景気は着実に回復している。その他アジアでも、一部の国では回復の兆しがみられる。中国では工業生産が増勢を強め、食糧生産が史上最高の豊作と見込まれるなど、生産活動は好調を維持している。ソ連では工業生産は引続き目標を上回っており、農業生産も回復に向っている。

国際通貨市場をみると、ドルは米国金利の低下等を背景に、9月に入って軟化した。

国際商品市況をみると、1月央以降上昇してきたSDR換算ロイター指数は6、7月には一旦下げ止まり、7月下旬以降ふたたび上昇したが8月央以降反落している。

石油情勢をみると、OPEC原油生産は、全体の生産上限を上回り、スポット価格は弱含みで推移している。

2 国際収支:輸出の増加傾向続く

輸出は通関輸出(数量ベース)でみると、前月比で7月0.3%減のあと、8月は4.8%増(前年同月比15.9%増)となり、増加傾向が続いている。最近数か月の動きを品目別にみると、テープレコーダー(VTRを含む)、化学製品など多くの商品で増加している。また、地域別輸出通関額(ドルベース)

の動きをみるとこのころアメリカ、東南アジア向けなどが増加している。

9月の通関輸出(速報、数量ベース)は前月比2.5%減(前年同月比10.8%増)となっている。輸出の先行きを示す輸出信用状接受高(ドルベース)は前月比で8月2.9%増のあと、9月は0.4%増(前年同月比8.8%増)となっている。7~9月期では前期比3.0%増(前年同期比7.1%増)となっている。

輸入は一進一退で推移している。通関輸入(数量ベース)は前月比で7月12.8%減のあと、8月は9.3%増(前年同月比1.6%増)となった。最近数か月の動きを品目別にみると製品類は増加しており、原料品もやや増加の兆しを示しているが鉱物性燃料は依然低水準で推移している。9月の通関輸入(速報、数量ベース)は前月比7.3%増(前年同月比10.3%増)となっている。

輸出入の動きを円ベースでみると、輸出は前月比で8月3.7%増、9月(速報)1.2%増(前年同月比4.1%増)となっており、輸入は8月7.0%増、9月(同)10.3%増(同1.9%減)となった。また、ドルベースでみると、輸出は8月4.2%増、9月(同)1.3%減(同10.1%増)、輸入は8月4.4%増、9月(同)8.7%増(同3.6%増)となっている。

8月の国際収支をみると、貿易収支(季節調整値)は輸出入とも増加し、前月よりも黒字幅はやや拡大したが、貿易外収支等の赤字幅も拡大したため、経常収支(季節調整値)の黒字幅は5,009億円(2,052百万ドル)と前月に比べやや縮小した。

また、長期資本収支は外国資本の流入幅が証券投資、外債により縮小したため、流出超過幅は4,714億円(1,931百万ドル)と前月に比べやや拡大した。

以上により、基礎的収支(季節調整値)は295億円(121百万ドル)の黒字となった。一方、短期資本収支等は1,294億円(530百万ドル)の流入超過に転じた。以上の結果、総合収支(季節調整値)は1,589億円(651百万ドル)の黒字となった。

外国為替市場にわける9月の円相場(対米ドル、インターバンク翌日渡し中心相場)は、月初246.15円からやや強含みに推移した後、下旬以降上昇し、236.10円で越月した。

9月の外貨準備高は月中243百万ドル増加し、月末には24,641百万ドルとなった。

3 国内需給:消費の伸びは緩やか

実質国民総支出(昭和50年基準、速報)の動向をみると前期比で1~3月期0.2%増のあと4~6月期は0.9%増となった。内外需別の寄与度をみると内需はプラス0.4(うち国内民需マイナス0.1)、外需はプラス0.5となっており、需要項目別では経常海外余剰が輸出等の増により増加したほか、公的固定資本形成なども増加した。一方、民間住宅投資などは減少した。

個人消費の伸びは依然緩やかなものとなっている。

個人消費の動きを家計調査でみると、実質消費支出(全世帯)は前年同月比で6月1.6%減のあと、7月は0.6%増となった。

世帯別には、勤労者世帯では0.4%増、一般世帯では0.1%減となっている。また、農家世帯(農家経済調査)の実質現金消費支出は、前年同月比で6月5.0%増のあと、7月は8.1%増となっている。

その後の消費動向を小売売上げ面からみると、全国百貨店販売額は前年同月比で7月5.7%増のあと、8月は1.7%増となった。また、チェーンストア売上高(店舗調整後)は、前年同月比で7月33.3%増のあと、8月は3.0%増となった。乗用車(軽を含む)の新車新規登録・届出台数は前年同月比で8月12.3%増のあと、9月は5.9%増となった。

賃金の動向を毎月勤労統計で見ると、現金給与総額は前年同月比で7月5.8%増のあと、8月は特別給与の減少を反映して1.5%減となった。給与の内訳をみると、定期給与が3.4%増(うち所定内給与3.1%増)特別給与が夏季賞与の支払時期のずれから27.2%減となっている。なお、特別給与は6~8月平均では前年同期比1.5%増となった。実質賃金は前年同月比で7月1.6%増のあと、8月は2.6%減となった。

住宅建設は持直しの兆しがみられるものの、前年水準を下回っている。新設住宅着工戸数(季節調整値)をみると、総戸数は前月比で7月6.1%減のあと、8月(速報)は7.6%増(前年同月比1.7%減)の9万5千戸(年率114万5千戸)となった。8月の動きを資金別にみると、前月比で民間資金住宅が7.3%増(前年同月比16.5%増)、公的資金住宅が1.1%増(同19.4%減)となった。

設備投資は、大企業では一部に増額修正の動きはあるものの、当面横ばい傾向となっている。また、中小企業では停滞が続いている。先行指標の動きをみると、機械受注(船舶、電力を除く民需)は前月比で7月10.0%減のあと、8月は8.5%増(前年同月比0.6%減)となり、ならしてみるとこのところやや増加傾向を示している。また、民間からの建設工事受注額(43社)は、前月比で7月4.8%減のあと、8月は6.0%増(前年同月比1.7%増)となった。

公共工事の動向を公共工事請負金額で見ると、前年同月比で8月2.5%減のあと、9月は10.3%減となった。公共事業関係費支払額は前年同月比で8月0.1%減のあと、9月は6.5%減となった。

鉱工業生産は、前月比で7月0.2%増のあと、8月は天候要因もあって2.8%増となり、輸出の増加を背景に業種間の差はあるものの増加傾向を示している。8月の動きを業種別にみると、電気機械(VTR、電子計算機など)、一般機械(ショベル系掘さく機、パルプ・製紙機械など)、金属製品など、石油・石炭を除く全業種で増加した。

製造工業生産予測指数は前月比9月2.2%増、10月0.5%減となっている。

鉱工業出荷は、前月比で7月0.2%減のあと、8月は5.3%増となった。8月の動きを財別にみると、生産財(普通鋼冷延広幅帯鋼など)、資本財(ショベル系掘さく機、電子計算機など)が増加したほか、非耐久消費財、耐久消費財、建設財も増加した。

鉱工業生産者製品在庫は前月比で7月0.3%減のあと、8月は2.1%減となった。これを業種別にみると、石油・石炭、電気機械、化学、非鉄金属などは減少した。一方、金属製品、繊維、輸送機械は増加した。

なお、8月の鉱工業生産者製品在庫率指数は94.3と前月を7.7ポイント下回った。

雇用情勢をみると、労働力需給はなお悪化した状態にある。有効求人倍率(季節調整値)は、7月0.57倍のあと、8月は0.58倍となった。一方、常用雇用(調査産業計、事業所規模30人以上)は前月比で7月0.1%減のあと、8月は0.2%増となった。所定外労働時間(製造業)は、前月比で7月3.1%増のあと、8月は1.0%増となった。

8月の完全失業者数は158万人で、完全失業率(季節調整値)は2.80%となり、前月に比べて0.29ポイント上昇した。

企業倒産の状況を銀行取引停止処分者件数で見ると、7月は1,249件で前年同月比2.0%増となったあと、8月は1,558件で26.2%増となった。

4 物 価:物価の安定基調続く

卸売物価は引続き安定した動きを示している。国内卸売物価は8月に0.5%下落したあと、9月は前旬比で上旬0.1%の上昇、中旬は保合い(上中旬とも前年同月比1.3%下落)となった。また、輸

[発行年リストへ](#) [発行年月日リストへ](#)